

聖書:第一列王記13章11～34節

説教:ああ、わが兄弟

はじめに

イスラエルが北と南の二つの国に分かれてしまったことで、困ったことが出て来ます。神殿が建っているエルサレムは南王国の中にありましたから、二つに分かれてしまったことで北王国の人は神殿で礼拝できなくなる。これをどうするか。そこで北王国のヤロブアム王は、二つの金の子牛を造らせ、これが自分たちを救った神々であると宣言し、サマリアと呼ばれる地方の町であったベテルに祭壇を築き、そこに金の子牛を置いて礼拝が始まります。言うまでもありませんが、これは間違っている。

それで神は、南王国ユダから「神の人」と呼ばれるひとりの預言者をヤロブアムのものと遣わし、祭壇の前でこう叫びます。「祭壇よ。祭壇よ。主はこのように言われる。『見よ。ひとりの男の子がダビデの家に生まれる。その名はヨシヤ。彼は、おまえの上で香をたく高きところの祭司たちを、いけにえとしておまえの上に献げ、人の骨がおまえの上で焼かれる。』」

このように主のことばをまっすぐに語った神の人が、今日の箇所を読むと獅子に襲われて殺されてしまう。いったいどうしてと戸惑います。神のみこころはどこにあるのでしょうか。ともに考えてまいります。

1 年老いた預言者がベテルに住んでいた

1) 神の人をだます

神の人がヤロブアム王の前でしたことと語ったことは、ベテルに住んでいたひとりの年老いた預言者の耳にも入ります。この預言者はこのことに強い興味を持ったようで、わざわざ自分で驢馬に乗り、神の人に会いに行く。そうして彼は神の人にこう言うのです。18節。「御使いが主のことばを受けて、私に『その人をあなたの家に連れ帰り、パンを食べさせ、水を飲ませよ』と告げました。」こうして彼はその人をだました。」

神の人は何度も、「あのベテルではパンを食べるべきではない。水を飲んではならない。帰るときはもとの道を通ってはならない」と神から三つの戒めを受けていたことを語っていました。ヤロブアム王から食事の誘いを受けたときもきっぱりと断った。それを知っていながら年老いた預言者は、嘘をついて神の人をだまし、自分の家に連れて帰りま

す。どうしてこのようなことをするか。ここだけでは動機が分かりません。

2) 主のことばを告げる

わからないことはまだある。20節から22節。「彼らが食卓に着いていたとき、その人を連れ戻した預言者に主のことばがあったので、彼は、ユダから来た神の人に呼びかけて言った。「主はこう言われる。『あなたは主のことばに背き、あなたの神、主が命じた命令を守らず、引き返して、主があなたに、パンを食べるべきではない、水も飲んではならないと言った場所でパンを食べ、水を飲んだので、あなたの亡骸は、あなたの先祖の墓には入らない。』」

神の人をだまして家に連れ帰り、パンを食べさせ、水を飲ませた後で、「あなたは主が命じた命令を守らなかったのだからあなたはみじめな死ぬことになる」、こう言われてしまうのです。神の人がこれを聞かされてどう思ったのかは、不思議なことに聖書はなにも触れていません。神の人は、自分のために用意された驢馬に乗り、まるで何事もなかったかのように淡々と家路につきます。

3) 神の人を葬る

その帰り道、神の人は獅子に襲われ、その亡骸は道ばたに放り出されたままにされます。神の人が獅子に襲われ死んだという知らせを聞いた年老いた預言者は、こう言います。26節。「それは、主のことばに背いた神の人だ。主が彼に告げたことばどおりに、主が彼を獅子に渡され、獅子が彼を裂いて殺したのだ。」

こう語ってから、やはりわざわざ自分自ら驢馬に乗って現場に向かい、神の人の亡骸を引き上げて自分の墓に納めます。自分は悪いことをしたという罪の自覚があったようにも見えますが、どうも判然としません。

2 神の人

1) 主のことばを語った

神の人は、ヤロブアム王の目の前で非常に厳しいことを語らなければならないという使命をもって、南王国ユダから北王国にわざわざ遣わされてきました。ヤロブアム王が怒って「彼を捕らえよ」と命じたとき、ヤロブアム王の腕に異変が起きなかった

なら、その場で神の人は殺されていたでしょう。ところが不思議なことに王の腕はしなびて伸ばした腕を戻すことができなくなる。それで神の人は殺されずに済んだ。そこに神の守りがあったことは確かです。

## 2) 主のことばに背いた

このようにして、いのちがけで主のことばを語った神の人が、この後なぜ獅子に襲われて死ななければならなかったのか。その理由については、預言者が言っています。「神の人が主のことばに背いたからだ。」でもどうでしょうか。神の人が自ら進んで主のことばに背いたのなら納得できます。でも事実はそうではない。この年老いた預言者が嘘を語って神の人をだましたからこうなってしまった。死ぬべきなのはいったいどっちなのか。だました預言者の方ではないのか。それなのにどうして神の人が殺されなければならないのか。そこにひっかかります。

## 3) 語り継がれる (第二列王記23章17節)

このことを考えていく一つの手がかりとして、この神の人の墓がこの後どうなったかについて見ておきたいと思います。神の人が祭壇の前で預言してからおよそ三百年経った後のことです。ユダ王国にヨシヤという王様が現れます。信仰者であったヨシヤ王はベテルに下って来て、かつてヤロブアム王が築いた祭壇を壊し、祭壇に仕えていた祭司たちを殺し、祭壇の上で焼いてしまいます。神の人がヤロブアムの前で叫んだ主のことばのとおりとなった。そのときの詳しい様子が第二列王記23章にあって、その中の17節には、ヨシヤと町の人々とのやりとりが書かれています。「『あそこに見える石碑は何か。』すると、町の人々は彼に答えた。『ユダから出て来て、あなたがベテルの祭壇に対してされたこれらのことを預言した神の人の墓です。』」

神の人は、ヤロブアムに真正面から罪を指摘し、人々に聞かれない都合の悪いことを語りました。こんなとき権力者はどうするか。神の人の存在を徹底的に消し去って何もなかったかのようにする。そのために様々な圧力をかけて人々が自由に語れなくするでしょう。石碑など建てるなどもつてのほかです。ところが、ベテルの人々は石碑を建てておおよそ三百年の間、神の人が何を預言したのか記憶して語り継いできた。これはどういうことか。言い換えれば、神の人が語ったこと、したことがベテルの人たちにそれだけ強い衝撃を与えたことを物語っている。

## 4) 「ああ、わが兄弟」

30節に戻ります。「彼が遺体を自分の墓に納めると、皆はその人のために、『ああ、わが兄弟』と言って悼み悲しんだ。」

何度も言いますがこの時イスラエルは北と南に別れて非常に仲が悪い。南からやって来た神の人が、たとえヤロブアム王に向けて語ったにしても、北王国の人たちにしてみればまるで自分たちが批判されたような気分になるはず。ところがベテルの人たちは「ああ、わが兄弟」と言って悼み悲しむのです。なぜこのようなことばが出て来るのか。不思議です。

## 3 神

### 1) 「だれが悪いのか」ではなく

ここは聖書学者の間でもどのように理解すべきか難しい箇所だと言われています。おそらく皆さんは混乱しながらもいろいろな考えが頭の中を巡っているのではないのでしょうか。あの年老いた預言者は、神の人をだまして死に至らしめたのだから、さばかれるべきではないのか。いっぽう、神の人にも問題がある。どうして彼は嘘を見抜けなかったのか。あれだけ神から戒めを受けていたのに、どうして主の命令を守ろうとしなかったのか。やはり神の人にも責任があるではないのか。

後出しじゃんけんということばがあります。後から私たちは高いところに立っているいろいろな批判し、ああだこうだと言って犯人捜しをしようとする癖があります。でも、聖書が言おうとしていることはそこにありません。

### 2) 神の人が死んだことで

そこで、この箇所の理解を促すために、こういう問いかけをしたいと思います。「もし神の人が殺されなかったなら、どうなっていたらろうか。」そのような問いかけです。

二つのことが言えます。一つ目。神の人が北の人々に対して罪のさばきをいのちをかけてまっすぐに語りました。語って、「はい、そのとおりです」と言えるのならよいでしょう。でも普通はできない。むしろ神の人を憎みます。もし神の人が死なないで無事にユダに帰ったなら、その怒りをずっと引きずり、ユダ王国との溝はますます深まっていったでしょう。でも神の人が死ぬことによって、「ああ、わが兄弟。」と言って神の人のことばを受け入れていった。あなたが叫んだことばはまさにそのとお

りである。悔い改めの心が人々に与えられたということではないですか。

それと同時に、いま国は二つに分かれてしまったけれども、お互いに兄弟である。いつかもういちど一つの国、教会として交わりを回復したいという思いも取り戻すことになった。もし神の人が死ななかったならば、このようなことばは出て来なかったでしょう。

そして二つ目。年老いた預言者は神の人が獅子に襲われ殺されたのを見たときこう告白しました。「主が告げたことばのとおり、主が彼を獅子に渡され、獅子が彼を裂いて殺したのだ。」

神の人が祭壇の前で叫んだことは必ず成就する。そのことをどのようにしたら信じられるのでしょうか。そのままではだれも信じなかったでしょう。年老いた預言者も疑っていたのだらうと私は考えています。それで、嘘までついて神の人を試そうとしたのではないか。ところが、神は年老いた預言者の口を通して、主の命令に背いた神の人は死ぬことになることと告げ、そして実際にそのとおりになった。これで初めて分かった。神の人が叫んだことばは、必ず成就する。神の人が死んでいのちを捨てることによって、神のみことばの確かさが証明されたことになる。もし彼が死ななかったなら、ベテルの人たちはだれも信じることはなかった。神の人が死んだことで、ベテルの人々は強い衝撃を受け、悔い改めの心が与えられ、三百年間も語り継ぐことになった。神の人の死は不可解だと思われましたが、彼が死ぬことによって大きな恵みがもたらされたのです。

### 3) 一粒の麦となる神

ヨハネの福音書12章24節にこのようなみことばがあります。「まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。」

神の人がもし死ななかったならば、サマリヤの地、ベテルの町には何も起こらなかったでしょう。でも神の人が死ぬことによって悔い改める人々が起こされていきました。神はそのような人々を忘れない。やがてイエス・キリストがサマリヤの地を訪れ、そこにも救いが届けられていきました。

そうしますと、神の人は無駄に死んだのではない。神の人を通して罪人が救われていく。神がそのように導いておられたのです。

神の人のことから、十字架でイエス・キリストがしてくださったことが鮮やかに浮かび上がってまいります。